

百合ラブ

YURI LOVE SLAVE RIN

「小」
「イラスト」
Story by satochi and
鈴音れな
Illustration by sudomone rena

凛

スレイブ

好きへの間合い

試し読み版

2DB
二宮アトリーム文庫

第一章 剣道部の危機と救世主？

第二章 可愛いなんて言わないで

第三章 格好悪い先輩じゃイヤ

第四章 奴隷やめる？ それとも続ける？

エピソード 部長とご主人様、どっちが偉い？

YURI LOVE SLAVE RIN

登場人物 紹介 CHARACTERS

いせもりみく 伊勢森美紅

電車内でいつも柑奈を見つめている黒髪の少女。柑奈とは対照的にギャルっぽい雰囲気。

M I K U



つかはらかなな 柄原柑奈

日々剣道に打ち込む女子校生。所属する剣道部の廃部を免れるため、部員集めに奔走する。



K A N N A

美紅が指折り数えて答えを急かす。頭の回転が悪くなっているのに、賢い選択をする時間すら与えてもらえないのか。

「分かった、分かりましたっ。奴隷にでも何でもすればいいじゃない！」

追い詰められて、自棄気味に承諾してしまった。とはいえ、いざ口にすると、それほど深刻に考えるほどでもない気がしてきた。確かにパシリは屈辱的。でも今は、彼女を部に入れるのが最優先。それに、みんなには秘密にすると言っているし、仲良くなってしまう、奴隷なんて変な約束も露見せずに、酷い事もされなくなるだろう。

「決まりですね。じゃあ……最初の命令です」

四つん這いになった美紅が、耳元に囁きかける。

（いいわよ、何でも言いなさい。ジュース？ パン？）

しかし、柑奈の想像は樂觀的すぎた。というより、根本的に勘違いしていた。

「……オナニー、見せてください」

再び、パチパチと目をしばたかせた。

またも日常で聞かない単語だった気がして、操り人形のようにぎごちなく首を傾げる。

「ごめん、伊勢森さん。もう一回言ってくれる？」

「やだもう、何回も言わせないでくださいよお。先輩のエッチ。じゃあ……よーつく聞いてくださいね。……ここでき、オナニー、してください」

「——!!」

息を飲んだ。さっきの試合とは別の不気味さに言葉を失う。彼女の口調は軽いのに、目は笑っていない。口元に笑みは浮かんでいるのに、瞬きひとつせず柑奈を凝視している。

「な、な……何を言ってるのよ！ そんな事できるわけ……」

「やってくれなきゃ困りますう。だって……」

切なげに目を細め、四つん這いで美紅が迫る。柑奈は手を後ろに突き、腰が抜けたような格好で後ずさる。でも放り出されていた竹刀で手を滑らせ、仰向けに倒れてしまった。

「きゃんっ！」

辛うじて頭を打つのは免れたものの、その隙に美紅が一瞬で間を詰め、のし掛かってきた。しかも柑奈が体勢を直すより早く、袴の紐を解いてしまう。

「な……何するの、やめて！」

「おや？ 奴隷が逆らうんですか？」

まるで脅すような低い声に身体が竦む。その隙に、腰回りの緩い袴は瞬く間に脚から抜けてしまった。剥き出しになった太腿に、彼女が頬擦りしてくる。

「ひッ!？」

柑奈の悲鳴もお構いなし。膝や脛、ふくらはぎを、彼女の指が円を描きながら撫で回す。まるで刷毛はけのような繊細な感触に、ゾクゾクと不気味な痺れが背筋を駆け上がる。しかも、

膝に唇が当てられた。軽く触れただけなのに、異常事態が神経を昂らせ、まるで電気を流されたように全身が強張る。

「や、やめて伊勢森さん……！ い、一体どうして……」

怖い。彼女の急変が。柑奈は怯えた。おかしな要求もだけど、うつとりと脚を眺める濡れた目は、試合の時とはまるで別人だ。

「やっぱり、先輩の脚、きれい……。運動部とは思えないくらいに細くて、可愛い……。ねえ、顔、よく見せて」

頬に手が当てられた。されるがままに見詰め合う。微笑みを湛えた妖しい視線に射竦められて、小刻みに震える以外、少しも動けない。

「あは、想像してた通りだあ。先輩の泣き顔、とつても可愛い……」

上気した顔で、美紅がうつとりと呟く。言われて初めて、柑奈は涙を浮かべているのに気がついた。それほどの恐怖を与えているという自覚が彼女にはないんだろうか。

（伊勢森さん、どうしちゃったの？ 泣き顔が可愛いなんて言われても嬉しくないよお）

押し返そうとしても、腕に力が入らない。美紅の視線が怖くて上を向いたら、鼠径部をすりと撫でられた。さらに強烈な電流が、ビリビリと柑奈の身体を痺れさせる。その感覚の正体が分からない混乱と戸惑いのまま、全身が痛いほど真っ直ぐに突っ張る。

「はぁうん!!」

「可愛い声え……。ゾクゾクするう。あん、パンツも可愛い〜」

ハツとなった。美紅が両脚を押し開き、股間に顔を寄せている。自分でも聞いた事のない甘い喘ぎの驚きと、下着を見られた羞恥。上下で同時に事件が巻き起こり、どちらを優先して隠すかパニックになる。一瞬の後に大慌てで両方を隠すけど、混乱は収まらない。

(なに……。今の……。私の声？ そ、それに……。パンツ見られちゃったよ……。！)

何の飾り気もない、真っ白な下着。体育や部活の着替えの時、みんなが意外にセクシーなものを身に着けているのを見て以来、自分のが子供っぽく思えて衝撃を受けた。かといって派手なものは似合わないと言めて、なるべく隠すようにしていたのに。

「やだっ、見ないで……」

柑奈は彼女を突き飛ばし、泣きべそで身体を丸めた。右手で襟を掻き合わせ、左手で裾を引っ張って、必死に身体と下着を包む。でも道着は短いので、お尻が丸出し。そんなみっともない姿を見下ろし、美紅がクスクス笑う。

「先輩だつて、さつき、わたしのパンツ見たじゃないですかあ。黙ってるなんて、意外とムツリさんですね」

「えっ!? あ……。ご、ごめんなさい……」

一瞬で目を逸らしたにもかかわらず、気づかれていたなんて。あれは単に彼女が迂闊なだけ。そのはずなのに、悪事を暴露されたような罪悪感に襲われ、つい謝ってしまった。

「よろしい。じゃ、命令を遂行しましょう」

「う、うん……」

どちらもお下着を見られたのだから、お互い様のはず。でも勝負に負けたり繰り返し叱られたり咎められたりして、柑奈はすっかり弱気になっていた。こんな理不尽な命令に従う必要があるんだろうかと疑問に思いながらも、幼い子供のようにコクンと頷く。

そして美紅も、まるで子供のようだった。大きく見開いた目をキラキラと輝かせ、きちんと正座する。これから始まる痴態に胸を躍らせているのが、見ただけで分かる。

でも、動けなかった。再び手が固まる。胸元からは離れたものの、そこからの行き先を見失い、指が強張る。彼女に逆らうためでも、抵抗感のせいでもない。もつと根本的で、重大な問題に突き当たったからだだった。

「ん？ 先輩、どうしました？」

「お……。おなにー……って、どうやるの？」

今度は美紅が固まった。瞬きも忘れて呆気に取られている。数秒ばかりの硬直の後、彼女は我に返ったように苦笑した。

「またまたあ。先輩、往生際が悪いですよ？ こういうのは、思いきって始めちゃった方が恥ずかしくくないです」

「そうじゃなくて、分からないものは分からないの！ や、やった事ないし……」

「……………嘘でしょ!？」

語尾が消え入る柑奈の声に対し、美紅が頭のでっぺんから抜けるような高音で驚いた。それがますます羞恥を煽る。もちろん、オナニーがどんなものかは知っている。ただ漠然とした知識しかなくて、実際にはどこをどうすればいいのか、見当がつかない。

そう告白すると、美紅は天を仰ぎ、目眩を起こしたようにグルグルと頭を回した。

「信じらんない。普通、一回や二回は経験があるものなんじゃないの?」

柑奈は首を竦めながら困惑した。女の子の自慰経験が百パーセントだというなら驚きも理解できるけど、そんなわけがない。

でも、そんな反応をされると、自分の方が異常という感覚になってしまうもの。

「へ、変かな……………」

「変ですよ!」

きっぱりと断言されて、柑奈は激しくうろたえた。ますます身体が動かなくなる。

「仕方ないなあ。わたしが教えてあげます。今日だけの特別サービスですよ?」

「う、うん……………」

どこか楽しそうに声を弾ませる美紅に肩を軽く突かれて、仰向けに転がる。これから何をされるのか分からず、手足が、全身が、小刻みに震える。

彼女の膝が、脚の間に割り込もうとした。固く閉じてそれを拒む。すると、柔らかな指

先が太腿を逆撫でした。強張った柑奈の身体は過敏に反応し、反射的に脚を跳ね上げてしまふ。その瞬間に生まれたわずかな隙に、膝を彼女の膝でブロックされた。しかも間髪入れずに、太腿にいた指が、下着の中心を撫で上げる。

「はああうっ!!」

鋭い悲鳴と共に腰が浮いた。ほんのひと擦り、掠った程度の接触に過ぎない。なのに、身震いするような衝撃が全身を一瞬で駆け巡った。

(い、今の……なに?)

羞恥で身体を竦ませながら、柑奈は困惑した。恥ずかしい部分を他人に触られ、ショック。そこまでは理解できる。でも、体内に残る、この感覚は何だろう。まるで、皮膚を内側からくすぐられているみたいな違和感。

「どうです? これ、すごいでしょ」

「す、すごいって言われても……」

この感覚をどう受け止めればいいのかよく分からない。でも、それが必ずしも不快感でない事が、柑奈の頭を混乱に陥らせた。訳が分からず目を回していると、その間に美紅が道着の紐を解いていた。Tシャツをめくられるのに少しも気づかず、すでにスポーツブラにまで手をかけられている。

「あ、だめ……っ!」

間に合わなかった。彼女の掌が膨らみを滑り、ブラが上にずらされてしまう。ついでのように親指で乳首を弾かれた。再び衝撃に見舞われ背中が仰け反る。

「先輩のおっぱい、ちっちゃくて可愛い。Bカップでしょ。それに、乳首も乳輪も薄ピンクで綺麗……。赤ちゃんみたい……。で、ここをこうすると……」

「や、やだやだっ。見ないで……。ひっ！」

コンプレックスの微乳をまじまじと観察されて、泣きそうだ。なのに美紅は無邪気にはしゃぎ、左手の親指と人差し指で乳首をクリクリと捏ね始めた。

「あひっ！」

ひと捏ねごとに新しい電流が生まれ、身体がコマ送りのようにカクカク悶える。しかも同時に、彼女は右手の中指で下着の中心を上下に擦った。柑奈は両手で顔を覆い、辱めに耐える事しかできない。

「やめて……。やめてお願い……。ひっ！」

「ンもう、先輩ったら。悶えるばかりじゃなくて、わたしの指の動きをちゃんと覚えてくださいよ。これは、オナニーの練習なんですよ？」

「れ、練習……？」

耳慣れた言葉にハッとなった。指の隙間から見えたのは、古びた天井。ここが、神聖な道場である事を今さらながらに思い出す。先輩たちが汗と涙を流してきた修練の場で、こ

んな淫らな行為をするなんて許されない。

「やめて伊勢森さん！　こ、ここでは……」

にわかには罪悪感が湧き上がり、美紅の手を払いのけようとする。まるでそれを予想していたかのように、彼女は左手を下着に潜り込ませた。

「——!？」

今度は声すら上げられない。大きく開いた唇をわなわなと震わせ、か細い息を漏らすだけ。下着越しなんて比較にならない。股間を、性器を、直に触られた衝撃を頭で処理しきれず、気が遠くなりかける。

(なに、この感じ……？　私の中がムズムズして……。いや……いやあ！)

本能的な恐怖におののき、身体をくねらせ逃れようとする。しかし美紅に肩をがっちり抱え込まれてしまった。どうしようと考えより早く、彼女が動いた。性器の縦溝を、指先の腹で素早く擦る。ひと撫でごとに生まれる強烈なパルスで身体が浮き上がる。

「ひっ、ひあつ、やああんっ！　は、放して……。そんなとこ触るの……変だよ……」

「触らなきゃオナニーになりませんよ。ほら、気持ちいいでしょ？」

「あん、あ……。分かんない……。分かんないよお」



「ひっ、あっ！ な、何回……同じ事を……んあっ」

「何回だって言っただけです。先輩は可愛いです。目も、唇も、小さい胸も……」

美紅が、口にした場所に次々とキスの雨を降らす。乳房の間も、唾液の後をべったり残しながら舐め上げる。かと思えば、高貴な人への挨拶のように手を取って、指に一本ずつ口づけた。最後に小指の関節を吸われると、柑奈は目眩を起こした。

「はあ……はあ……。やめて、私、可愛くなんて……」

「ンもう、強情ですなえ」

「ちよ、何を……きやふっ!!」

彼女は右脚を持ち上げて、膝に口づけてきた。そんなところにキスされるのは初めて。どうか愛撫の場所になるなんて思わなかったのだ、快感よりも戸惑いが先に立つ。

「前にも言ったけど、先輩の脚、好きなんです。この子供っぽいライン、堪んない……」

「やっぱり馬鹿にしてる……はうんっ」

蠢く指先がふくらはぎをなぞり、膝裏をくすぐる。想定外の場所ばかり攻め続けられ、腰が蕩けたように力が入らない。

「それから、こっちも……」

袴の横の隙間から、手が忍び込んでくる。今度こそ狙いはあそこに違いない。
(でも、また意表を突いてくるつもりかも……)

一瞬の迷いが、反応を遅らせた。身体の中心への侵入を、容易に許してしまう。慌てて腿を閉めた時には手遅れで、彼女の手が下着の底を潜り抜けていた。

「……………濡れてる」

サツと顔から血の気が引いた。失禁を知られたかもしれないと小さく震える。

「んふ、すつごくくネバネバしてる。先輩だったら、いっぱい感じちゃったんですね。どれですか？ キス？ おっぱい？」

美紅が無造作に淫部をまさぐる。粘るという事は、おしっこじゃない。安堵したけど、よく考えたら恥ずかしいお漏らしに変わらない。

「さ、触らないで……………や……………はぁンッ！」

首筋に吸いつかれ、痺れ薬でも打たれたように身体がワナワナ震え出す。快感が、逃げようとする意志を腰砕けにする。

「あったかい……………。柔らかくなってる……………」

「だめ……………だめえ……………！」

力なく呟くだけの柑奈の袴を、美紅は片手で器用に解いた。紐が緩んでしまえば、後は柑奈が悶えるだけで勝手に脱げてしまう。そこへ追い打ちをかけるように、彼女の脚が柑奈の腿を挟んだ。滑らかな肌が触れ合い、再び漏れた淫液が不躰な指を濡らす。

「さてと。じゃ、先輩の一番可愛いところ、いっぱい愛してあげます」

身体を起こした美紅が、下着に手をかけた。この瞬間は、何度経験しても緊張で身体が竦む。脚を縮めて可能な限り抵抗を試みるけど、動かなければ大した障害にはならない。

「や、やめ……ああああ……」

湿ってすっかり重くなった布切れが、両脚を通り抜ける。いつものように脚を開かされるのかと思ったら、美紅の方が床にごろんと寝ころんだ。そして満面の笑みを浮かべ、柑奈を手招きする。何を要求されているのか分からず困惑したけど、シャワー室での姿勢に似ていると思った瞬間、理解してしまう。

「い、いや……」

「先輩、め・い・れ・い、ですよ」

明るく、可愛く、非情な言葉を投げかけてくる。柑奈は半泣き顔をふるふると振り、でも、逆らえずに起き上がった。羞恥に眉を下げ、悔しさに唇を固く結び、往生際悪く、なるべくゆっくり時間をかけて、彼女の顔を膝立ちで跨ぐ。それでもなお覚悟が決まらず、火の出そうな顔を両手で覆って、裸の股間を「ご主人様」の目に晒す。

「先輩……もしかして、見られるの癖になっちゃった？」

「そ、そんなわけないでしょお……！ 恥ずかしくて、死んじゃう……。い、伊勢森さんこそ……どうして他人のそこを平気で見られるの？」

そっちの方が柑奈には信じられない。膝にも太腿にも力が入らず、いつ崩れ落ちてもお

かしくない状態。

「誰のでも見たいわけじゃありませんってば。先輩の、だからですよ」

「わ、わけ分かんない……ひんっ！」

中指の爪が淫裂を逆撫で。そのわずかな刺激が下半身を挫いた。糸が切れたように腰が彼女の顔に落ちる。柑奈が持ちこたえようとするより早く、陰唇をぺろりと舐められた。

「ンあああつ！」

甘電流に頭を突き刺され、お尻が強張る。彼女はさらに、振じりながら唇を押しつけてきた。溢れる蜜を掬い取り、恥溝の奥を抉り、膣口を舌尖でくすぐる。ぴりぴりと切ない快感が柑奈の胸を締めつけ、涙が零れる。

「ん、ちゅ、ちゅる、ちゅっ。先輩のここ……ん、ちゅ、小さくて可愛い、から……ぺろぺろ、ちゅ、こんなに舐めても平気……ずるるっ」

「そんな、強く、吸ったら……はうん」

派手に音を立てて、愛液を吸られた。女の子にあるまじき、はしたなく濁った水音。耳を塞ぎたくなるほどなのに、なぜか胸が異様に昂る。何度も聞かされ慣れたというわけじゃない。居ても立ってもいられないほど、股間が尿意に近い疼きを覚える。

「あ、や……やあん！」

それだけでも身悶えせずにはいられないのに、今度はクリトリスを責められた。細やかに

動く舌先で、硬くなった肉芽を絶え間なく弾かれる。鋭い痺れが全身を苛む。

「ひっ、んは、んくうううっ。も、も……もう、あッ！」

菌を食い縛っても、声が漏れる。勝手に蠢く指が、無意識に自分の乳房を揉みしだく。

（ま……またイカされちゃう！）

先輩として、これ以上の醜態は見せられない。全身を突っ張らせ絶頂に抗おうとする。

でも、そんな気持ちの奥から、ふと、諦めが顔を出した。

（抵抗して、どうなるの？）

初めての時から、もう両手の指で数えられないほど痴態を見られた。明日からも回数を重ねる事は間違いない。今さらここでプライドを発揮したところで、何の意味があるんだろう。

（それならいっそ、気持ちいい方に流されちゃっても……）

力を抜いて、舌愛撫に身を任せようとした、その時だった。

「んふっ……。先輩、また負けちゃうの？」

脚の間から、美紅の挑発する声が出た。

「また負けてイッちゃうの？ いいですよ、何回でもイカせてあげます。先輩は、わたしに絶対勝てないんだもんねー。あ、わたしだけじゃなくてえ、自分より大きい人には、一生、ぜーったい、勝てないんだっけ？」

挫けた心を見透かしたような嘲笑が、消えかけていたプライドを激しく煽った。再点火したそれは、ついでに怒りも呼び起こす。

「この……このっ！ 勝手な事ばかり言わないで！」

苛立ちと悔しさが柑奈を奮い立たせた。でも、とにかく反撃したい気持ちに急ぎ立てられるあまり、何の勝ち負けか完全に失念していた。

「えいっ！」

「きゃはあん！」

美紅に跨がったまま身体を倒し、スカートをめくる。彼女の悲鳴が嬉しそうなのが気に入らなくて、強引に下着を剥ぎ取った。内腿になったので少しは抵抗しているのかと思っただけ、どちらかといえば脱ぎやすいように協力していただけ。

「ンもう！」

まだ余裕があるのが気に入らなくて、彼女の股間に頭を突っ込んだ。ムツとする女の子の発情の匂いを吸い込んで、口の中に涎が溜まる。柑奈はそれを舌に乗せ、目の前の卑猥な花びらに思いきり塗りつけた。

「んっ……ンきゅ……っ！」

美紅の音色が、わずかに変わった。何かを我慢するように息を詰まらせている。反撃のチャンスと見た柑奈は、彼女の秘裂を両手で開いた。露出したピンクの粘膜は想像以上の

蜜液まみれ。生々しい匂いのそれに唾液を混ぜて、白く泡立つほど舌先で攪拌する。

「くちゅ、くちゅくちゅ、ぴちやぴちや、ちゅるん」

「あはん、先輩……せんばあいつ！」

蜜を啜り、陰唇やクリトリスを震わせる。少し前まで舌の使い方なんて何も知らなかったのに、今は自分でも驚くほどに器用に動いて美紅を喘がせる事ができる。

「せ、先輩……その調子、ですつ。もつと……もつと強く……ちゅ！」

「きゃふっ」

彼女も愛撫を再開した。疼く秘裂への口づけに、腰が蕩ける。背筋が震える。思わずうつとり目を閉じてしまい、止まった舌を慌てて動かす。

「先輩……ちゅ、どっちが先にイカせるか、競争……ちゅばっ。わたしに勝てる？　じゅる、じゅるるる、じゅるう！」

「あうんっ。そんなの、ずるい……じゅばっ」

先に愛撫を始めていた美紅が有利に決まっている。でも、この生意気で失礼な後輩に負けるのは嫌だった。

「いいよ。思う存分、ご奉仕してあげる。ちゅばちゅば、じゅる、じゅば、じゅるるっ」

柑奈は自分でも信じられない下品な音で、美紅の淫裂を吸いまくった。彼女は前に自分で言った通り、陰核が弱い。陰唇に隠れた硬肉芽を指で発掘し、舌先で撫で転がす。

「あ、あ、ンあ！ 駄目、そこ感じすぎ……ひいっ！」

美紅が仰け反った。柑奈の脚に指を食い込ませるほど感じている。

（今日は、勝てる……勝つ！）

震える脚を押し開き、陰核責めに集中した。転がせば内腿が強張り、吸えばお尻が浮き上がる。次第に美紅を操っている気分になって、勝利への確信がさらに強まる。

でも、彼女はそんなに甘くなかった。

「……………ヒッ!？」

甲高い悲鳴が迸る。彼女が指と唇と舌を総動員してきた。陰唇をくすぐり、口づけ、膣口を舐め回す。そんな器用な真似は柑奈には無理。有利に立ったと思っただのに、背筋の甘い痺れが頭まで到達し、震えて半開きの唇の端から、涎が糸を引いて垂れ落ちる。

「あ、あ……ん……くっ！」

それでも歯を食い縛り、攻撃を再開した。柑奈はとにかく陰核への一点集中。でも手指や唇が痙攣して効果が怪しい。性器の快感に抗い、必死になって舐め回す。

「先輩、先輩……はあ……ちゅっ」

必死なのは美紅も同じらしく、股間に吹きかけられる息が、荒くて熱い。彼女の性器も発熱して、匂いが強くなる。舌を刺激する女の子の味と相まって、意識が朦朧となってくる。エッチの事しか考えられなくなってくる。

(はあ、ああ……気持ちいい……気持ちいい！)

頭の中で、同じフレーズを繰り返す。でもこれは、どちらが先に達するかの勝負。快感に溺れながらも、意地だけが残って無我夢中で舌を動かす。

「ンあ、先輩……すごい、わたし……わたし、すごい……ンっ！」

「伊勢森、さん……わたしも……あ、あ、ダメッ！」

彼女の興奮にシンクロして、柑奈の身体も昂った。二人の腰が暴れ、踊り狂い、気持ちよすぎる愛撫から逃れようとする。一瞬でも逃げられたら負けてしまうと、互いに相手を捕まえて、陰核を激しく吸い合った。

「あ、ダメ先輩っ！ それダメ、きつい、ダメええっ！」

美紅が仰け反る。彼女の唇が離れる。でも勝ったと思つた次の瞬間、強張つた指が柑奈の陰唇を小刻みにくすぐった。限界だった過敏な性器は、その刺激に耐えられない。

「あう、あ、あ、んんあ……はああん！」

甘くて鋭い刺激が頭を貫いた。全身くまなく快感で染められ、痺れと痙攣で身動きできなくなる。それだけでも気持ちよすぎて辛いのに。

「せんばい、せんばあい！」

「あ、ダメっ。いま触られたら……ふあああああっ！」



合宿所に戻った美紅は、部長たちの前で、いつも通りに明るく振る舞った。微塵も異常を感じさせない演技力に舌を巻くけど、柑奈はそんなに器用じゃない。硬い表情で、遅くなった事を詫びるのが精一杯。

「柄原先輩ったら、校内で迷子になってたんですよ」

ケンカのせいなのか、美紅が、打ち合わせと違う説明を先輩たちにした。彼女の馬鹿にしたような口調に腹を立て、シャワーを浴び直し、お先にと寢床に入る。それがきっかけとなって、他のみんなも就寝する流れになった。

すぐに、周囲から寢息が聞こえ始める。連日の稽古で疲れきっているせいだ。でも、柑奈は少しも眠れずにいた。目が冴え、一睡だつてできはしない。そんなのは当たり前。後悔と罪悪感が怒涛のように押し寄せる中、安息を得ようなんて方が間違ひ。

（バカバカバカ。私の大バカっ！）

美紅に酷い事を言ってしまった。彼女は少しも悪くないのに。部に誘ったのは自分。臆病で格好悪いのも、全部が柑奈のせいであつて、彼女を責めていい理屈なんて、どこにも存在しない。あれは、弱い自分を直視するのに耐えられない、ただの八つ当たり。

（どうしよう……どうしよう。あれじゃ、本当に伊勢森さんが部をやめちゃう……！）

早くどうかしなないと手遅れになる。いや、すでに最悪の事態に陥っているのかもしれない。後悔が焦燥を呼んできた。胸と頭が、動揺の渦に巻き込まれていく。

（謝らなきゃ……。謝って済むの？ 許してくれる？ もう間に合わない？）

時間は刻一刻と過ぎていく。一秒遅くなるごとに、関係の修復が困難になっていく気がしてならない。早く発言を訂正し、取り消し、許しを乞わなければ。そうと分かっている、怖い。許してもらえない場面が頭にちらついて動けない。いつそのまま動かずに、取り返しのつかない事態を受け入れてしまおうか、なんて考えまで頭をよぎる。

（バカ！ それじゃ先輩たちに顔向けできないでしょ!!）

自分の理性的な部分に叱られて、ハツとなった。己の都合なんて考えている場合じゃない。たとえ嫌われたとしても、美紅はこの部に必要な人。

自分の気が変わらないうちにと、柑奈は動き出した。枕を抱えて起き上がり、窓際で背中を向けて寝ている美紅のもとへと、忍び足で近づいていく。

「伊勢森さん。……伊勢森さん」

正座して、先輩たちを起こさないよう、ぎりぎりの音量で呼びかける。彼女はすぐに目を開いた。最初から起きていたんだろう。戸惑う様子もなく、柑奈を見上げた。その表情に、感情は窺えない。それを、どう解釈していいか分からない。

（嫌われ……。ちゃった……。?）

胸が詰まる。涙が零れそうになる。それでも、すべき事はしなくては。

「……………許して、ください。さっきのあれは、本気じゃなくて……………」

柑奈は膝を揃えて正座すると、枕を横に置き、深々と頭を下げた。

長い刻のような、数秒の沈黙。

膝に、手が置かれた。恐る恐る顔を上げると、美紅が布団をめぐっている。入ってこいという意味だろうか。躊躇するけど、とりあえず逆らう事は許されなれないと思い、急いで身体を滑り込ませる。布団を頭から被せられ、密談におあつらえ向きの、防音に優れた密室ができあがる。とりあえず安心した柑奈は、即座に謝罪を続けた。

「お……………怒ったよね。でも、あれは……………その。恥ずかしくて八つ当たりしちゃったっていうか……………。許して……………とは言わない。でも部はやめないで！ あれだけは本気じゃないの。私はどんなに嫌われてもいいから……………先輩たちのために、力を貸して……………」

また、胸が苦しくなった。何がそんなに悲しいのか分からないまま、握った右手を左手で包み、神に祈るようなポーズで懇願する。どうせ真っ暗なのだけど、彼女の表情を見るのが怖くて必死に目をつぶる。

「せんば……………」

「もっ、もし伊勢森さんに、まだその気があるなら……………！ 私にどんな事してもいいから！ 気の済むまで苛めていいから。だから……………！」

必死に懇願していながら、答えを聞きたくなくて美紅の言葉を遮ってしまふ。すると、闇の中で彼女が小さく息を吐いた。そして柑奈の唇に、軽く指を押し当てる。

「もう……分かってますよ。あんなところ見られたら、誰だって冷静じゃいられないと思います。怒ってませんから、落ち着いてください」

「本当？ 本当に怒ってない？」

怖いほど優しい声。どうしてこんなに必死になっっているんだろう。自分でも理解できないほど、何度も聞き返す。美紅も飽きる事なく、頷いてくれる。

「でも、お漏らしした先輩、可愛かったですけどね」

優しくしてくれたかと思ったら、また意地悪を言ってくる。思いきって目を開いたら、美紅がクスクス笑いを堪えていた。屋上で晒した自分の恥ずかしい姿が脳裏に甦り、堪らず文句が大声で出る。

「ひ、ひど……っ!?!」

間一髪、それはキスで防がれた。またふざけてる、なんて思ったのは一瞬だけ。彼女の柔らかい感触が、柑奈の胸で渦巻いていた、様々な暗い感情を溶かしていく。苛々も怒りも、焦りも罪の意識も。

(また、キスしてくれた……)

どうして、こんなに嬉しいんだろう。悲しさや辛さとはまるで別の感情で胸がいっぱい

に詰まって、溢れて、涙となって零れ落ちた。この、ほんの小さな接触が、どんな言葉より安心できる。初めて奪われた時、嫌だと思ったのが信じられないくらいに。

(……………あ)

美紅が姿勢を変え、覆い被さってきた。布団から出ないように気をつけて、器用に唇はしっかりと押しつけたまま。姿勢が安定したところで、柑奈から舌を伸ばす。いきなり強く吸われて思わず呻いてしまったけれど、下から彼女を抱き締め、それを懸命に堪える。

「部もやめるつもりはありませんから、心配する必要はありません」

「そ……そうなの？」

唇を舐めながら、思い出したように美紅が囁く。戸惑い気味に尋ねる柑奈の顔を、彼女は胸に抱えるようにして押しつけた。

「当たり前じゃないですか。やめたら、こんなに可愛い先輩を、もう苛められなくなっちゃうんですよ？ そんなもつたいない事、できるわけないでしょ」

「伊勢森さん……」

酷い事を言われているのに、嬉しかった。嬉しくて嬉しくて、クッションのような美紅の胸に鼻先を擦りつけた。

「あん……。感じちゃう……」

狭い密閉空間で、妖しい声が低く響く。その音に耳をくすぐられ、柑奈の脚の間も即座

に反応した。寝る前に替えた下着を、また濡らしてしまった。しかも、そこに彼女の指が触れてきた。短パンの隙間から潜り込み、下着の底布を撫でられて、さらに熱い蜜液が、歓喜と共に脈打つように溢れた。

「先輩ったら、またお漏らし？ ホントにいやらしいんだから……」

「ご、ごめんなさい……」

耳に意地悪な囁きを吹きかけられ、うつとりと身震いする。再びキスされ、とろりと流し込まれた唾液を嬉々として飲み込む。美紅は怒っていないと言っていたけど、まだ不安が拭いきれなくて、教え込まれた事を忠実にこなしてご機嫌を取ろうとする。

「あは……んふうん……」

二人は、喘ぎながら相手の短パンと下着を脱がせ合った。わずかに身じろぎするだけでも、布団と擦れる音が静かな空間で大きく響き、寝ているメンバーを起こすのではないかとヒヤヒヤする。

そんなに警戒が必要なくらいなら、やめればいい。だけど、一度火が点いた身体は止められない。脱いだものを布団の外に放り出し、自由になった下半身を密着させた。

「あ……しくつ」

互いに、太腿で相手の秘裂を擦り合う。快感で仰け反る柑奈のTシャツを、美紅の手が捲り上げた。ブラをしていなかったたので、乳房を直に揉み上げられる。乳首を軽く撫でら

す。シートにおねしよみたいな染みができそうで心配になるけど、媚電流に脚が突っ張って、それどころじゃない。

「ヒッ……はっ！」

最初は愛撫しあっていたのに、気づけば一方的に責められている。美紅も気持ちよくさせたいと思っても、柑奈の手が届く前に乳首を甘噛みされてしまう。

「きゅっ……ふあっ。伊勢森、さんっ。あんまり激しく……痛くしないで……」

「だめ……。感じてる先輩、可愛いから……はあ……はあっ！」

「きゅふあっ！」

彼女は喘ぎながら、硬直乳首に歯を食い込ませ、コロコロと左右に転がした。恐怖手前の程よい焦燥感と心地いい痛みに、全身が悦びに打ち震える。

「苛めて……もっと苛めて……っ!!」

懇願が途中で詰まった。美紅の手が再び淫裂に潜り込んで、陰核を抓り上げた。いきなり痛覚を与えられ、全身が弓なりに突っ張る。なのに淫裂だけは熱く緩んで、悦びの蜜を垂れ流した。彼女はそれを掬い取り、塗りつけながら円を描いて恥褻をいじり回す。

「ンあ、あ！ それ、だめ、だめっ……！」

駄目じゃないのに、気持ちよすぎて拒否の言葉を口走る。もちろん、そんな事で美紅の愛撫は躊躇しない。素直にならない口に指を二本も突っ込み、容赦なく掻き回す。

「何が駄目なんですか？ そんな事を言うお口はどれですかあ？」

「あ、あぶ……。ごめんなさ……。ごふっ」

舌を押さえ込まれて苦しい。飲み込む事のできない唾液が大量に溢れ出す。年下の娘にお仕置きされる屈辱感。なのに、柑奈の胸は激しくときめいた。

（私、どうしちゃったんだろう。こんな事されてるのに、悦んでる……）

どんな痛みも辱めも、美紅に求められているのだと思うと、満たされた気持ちになる。異常だとは思うし、優しくされたいとも思うけど、それより、恥辱による快感は、媚薬のように柑奈を酔わせた。

「はあ……。もつと、もつとお……」

とろんと蕩けた瞳でおねだりする。凛々しい剣士を目指していたはずなのに、口腔を苛める指に、嬉々として舌を絡めるなんて。でも、零れた唾液を喉から舐め上げられると、まるでご褒美をもらえたように昂った。

「はあああ……！！」

絶頂に近い高揚感。それを見下ろしながら、美紅が少し身を起こした。口から引き抜いた唾液まみれの手で自分のTシャツをめぐり、乳房を露出させる。暗闇に慣れた目に、ぼんやり浮かぶ白い双球。密閉空間に、欲情した少女の甘い匂いが充満し、食欲をそそられる。思わず生唾を飲み込んで、むしゃぶりつきたくなる。

「はあ……はあ……！」

まるでお預けをくらった仔犬のように、だらしなく息を荒らげる。いつ舐めると命令されてもいいように、口の中いっぱい唾液を溜め込む。

「ふふ……。せーんばい、一緒に気持ちよくなりましょ」

「え？ ……んあっ」

美紅が胸を重ねてきた。柑奈の慎ましい乳房が、量感たっぷりの乳房に包まれ、潰される。彼女が身体を揺らすたびに、敏感な硬乳首同士が絡み合い、擦れ合って、脳天を鋭い快感電流に直撃される。

「あはあ……。気持ちいい……。ねえ先輩は？ おっぱい、気持ちいい？」

コクコクと頷くけど、果たして彼女に見えているかどうか。でも声を出す余裕がない。頬に手を当てられたので、そこに自分の手も重ねて、意思を伝えようとした。

「あ……ふあむん」

そんな事はお構いなしにキスされた。もちろん柑奈も舌を差し出す。重なり合った唇と胸が、くねくねと絡み合い、淫裂も激しく撫で回される。太腿までが擦れ合って、何か所も同時に快感が発生する。全身くまなく襲う快感嵐に、柑奈が耐えられるはずがない。頭の中まで掻き回されて、何も考えられなくなる。

（わ、私も……伊勢森さんを……）

それでも、わずかに残った意思の力で美紅の股間に手を伸ばす。彼女のそこも可愛がらなければ不公平。

「ンあっ！」

一気に淫唇に指を埋めると、不意打ちを受けた美紅が涎の糸を引いて仰け反った。しかし、伊達にご主人様はやってない。再び唇を重ね、それだけでなく柑奈の頭を抱え込み、激しく口腔を舐め回す。同時に、素早く小刻みに、淫唇を震わせてきた。

「ふむう!!」

口を塞がれ、柑奈は目を白黒させた。それでも負けず嫌いが働いて、彼女と同じように舌と指を動かした。背中を抱き寄せ、自分から胸も密着させる。イニシアチブを取ろうと争う二人の身体が転がって、横向きに抱き合う格好になる。

「はふ、ふあ、あふ……。伊勢森さ……ンッ」

「先輩……せんぱい……あうっ」

三年生の寝息を気にしつつで、大きな声を出せないのがもどかしい。それでも、小声で互いに呼び合うだけで、この上ない悦びが頭と胸を満たしていく。舌を絡め合い、胸を押しつけ合い、太腿を擦り合わせながら相手の秘裂を責め立てる。

「あ、やばい……。先輩、わたし……や、あっ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックダウンノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ

カルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子小説

フリーダム120%!
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界
ドキドキ
妹は
イケてる

ドキドキキアラフな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫